

自治大卒業生の声③

自治大学校卒業生（第3部課程第109期）

鳥取県庁 川上 裕子

編集者注：本稿は、自治大学校における演習・講義の特長や卒業後の研修効果の発揮などについて、自治大学校の卒業生が記したものです。

1 はじめに

平成30年7月9日入寮。西日本豪雨災害直後、前日まで現場対応にあたられていた方、参加を断念された方もあった中、皆が地元や被災地域の心配をしながら3週間余りの大学生活がスタートした。

2 第3部課程の概要

管理者として必要な政策形成能力と行政経営能力の増進を行い、かつ公務員としての使命感及び管理者意識の高揚を図るという目的のもと、都道府県や市町村だけでなく警察本部や市長会等、団体属性も職種（行政職・専門職も混在）・職責も、さらにそれぞれ組織の中で置かれている立場、年齢も幅広い124名（うち女性16名）が集結。

総合教養から地方公共団体における公共政策、行政経営に関する高度な知識、直面する地方自治の課題及びその背景となる政治、経済等の分野にわたる見識、全体の奉仕者としての公務員の在り方、首長と部下職員をつなぐ組織の中で求められる管理職員像など幅広く受講した。

また今期からは、新たにレポート演習が取り入れられた。これは、個々の行政課題に対応して問題を発見・分析し、組織方針の構想を立て、実現に向けた方向や手法について、首長や住民等に説得できる文書にまとめ上げるものであり、グループ討議を重ねながら研修生一人ひとりが進めていった。

3 研修を通して学んだこと

研修は、全体を通じて、管理職としてのリーダーシップとそのベースとなる知識・判断力を身につけるものであった。そして、講師の先生方からは、ライフワークをテーマに取組や研究成果を惜しみなく提供、ご教示いただいた。

各講義の中で共通していたのは、データをもとにした分析の必要性、これらの証拠に基づく政策立案とわかりやすい施策を作り上げることであった。具体的に言うと、事実や客観的データを積み上げ、多角的な視点で分析し、これらの裏付けされた分析結果をもとにした施策を、住民（相手）にわかりやすく伝え、納得いただくことにより円滑な施策運営がなされるということ、説得できる力が必要となるということである。自分自身が、感覚だけで物事を進める傾向にあること、経済・経営感覚が薄いことなどを再認識させられた。

また、施策があればこれも、十把一絡げになってはいないか。目的と手段は相対するものにするべきで一石二鳥はだめとのお話もあった。エンドユーザーの顔を見ながら、実情やニーズをいかに把握できるか。現場感覚、気づきの弱さを痛感するとともに、市町村の現場で日々、対応されている皆さんとの情報交換は大変有意義であった。

4 研修を振り返って

自治大には、全国の類似事例や過去の政策研究報告など多くの資料がある。これらも有効活用しながら、持寄事例の検討やレポート作成を進めたが、事例検討などの演習は、研修効果を高めるためにも、あらかじめ研修生各自がテーマを設定して共有し、事前に各自自治体の基礎情報、施策や取組、データ等の資料を持ち寄った上で、検討できるとよかったと感じた。共通課題を持つテーマで

あっても、入校後では、自分の自治体の情報やデータの入手しづらく、特に 経験のない分野、業務等は内容を深めづらい面もあった。

各研修生は、各自治体の規模や立場、文化や思想、取り巻く環境、住民との関係性等の違い等から、それぞれ目指すものが異なる。演習での検討協議や日々の情報交換の中では、共感する部分もあれば素直に受け取れない部分もある。ただ、その結論に至った筋道、背景事情から見えてくる施策実現・推進に向けた各自治体の判断や取組みに触れるにつき、あらためて冷静に自分の自治体を振り返り、本県の各市町村であれば、どこで何ができるのか、県は関与できるのか、各地域資源をどう活用できるのか考えていくのは楽しかった。

その中で、都道府県からの参加者が少ないのは残念だった。広域自治体ならではの視点での情報交換等もできる絶好の機会であると感じた。組織体制、職員配置状況等をみても管理職員が長期にわたっての研修で不在となることでの支障は理解するものの、この立場だからこそ学び振り返る時間、経験は代えがたいものであり、ご検討いただきたいと思った。

5 おわりに

自分の中で描く管理職像と本来求められる管理職像、さらに自分が自治体（組織）の一員として何をすべきなのか、何をしたいのか悩みつつも、目先の業務や生活に追われる日々から一転。職場や家族と離れ全寮制での学生生活。

有益な講義をともに学び生活した仲間たちと意見交換しながら、振り返りができる環境。特に、自立と協調の絶妙なバランス感覚で、拘束しないけれども気遣いある心地よい関係性、一体感の中で過ごせたこと、貴重な経験をさせていただいたことに感謝している。それぞれ自治体の事情は違えども、同世代で共通課題も多く、楽しみながら本音で話せる仲間たち。今後も切磋琢磨していきたい。